

録というのはアメリカに有名なものが随分あるのですが、全然翻訳されませんね。

スミスは、硫黄島に来る前に太平洋でタラワ、マキン、サイパン、ティニアン、グアムの上陸作戦をすべて指揮しています。非常に激しい性格を持っていました。「凶暴に吠えるスミス」という渾名がつけられた歴戦の猛将です。このスミスが栗林中将は太平洋で戦った敵の中で最も手ごわい相手だったと、他の指揮官と違って栗林中将にははつきりとした個性があつて、それが硫黄島の恐るべき地下防備に明確に示されていたと書いています。

スミスの回想録を読むと、彼が栗林中将というライバルをどういうふうに見ていたのかということが、具体的に知ることが出来ておもしろいのですが、そのこともさることながら、栗林の直面したアメリカ軍、特に海兵隊がどういう戦い方をする連中であつたか、それがアメリカ文化の本質とどんなふうに関がっているのかということが、この回想録からはつきり浮かび上がってくる。今日は最後にそのことについてお話しをしたいと思います。

先程栗林中将の戦訓をご紹介しました。アメリカ軍の物量と合理的戦法の凄まじさの前になすすべが無いと、そういつた苦衷を訴えている戦訓ですが、あそこに記されているアメリカ軍の戦い方、栗林中将の言うアメリカ軍の傍

若無人な迫力、これはまさにスミス達を中心となつて長年に亘つて開発してきた戦い方でした。

冒頭に申しましたように、戦争も文化であつて、アメリカ人はアメリカ人らしい戦い方をするわけですから、スミス達の海兵隊の戦い方を知ることによつて我々はアメリカ文化の重要な本質を知ることが出来るだろうと思います。

その本質というのは、恐らく日本に一番欠けているものだろうと思います。一言で言いますと強靱な合理精神であり、太平洋のアメリカ海兵隊は水陸両用作戦という斬新な戦法に基づいて行動するんですが、これがまた軍事的合理性をどこまでも追求するという戦法であります。本来水陸両用作戦の構想が芽生えるのは第一次大戦直後であり、第一世界大戦で日本は戦勝国になり、マリアナ、カロリン、マーシャル諸島を委任統治領として獲得する。そうするとどういふことになつたかという、アメリカ海軍の本拠地のハワイと、前進基地のグアム、フィリピンとの真ん中のところに、日本が立ちふさがるということになった。しかも、日露戦争以後、日米関係は緊迫していた。

そういう状況の下でスミス達海兵隊の一部の将校は、日米戦はそう遠くないと考へた。特にエリスという海兵隊少佐が太平洋方面における戦争の推移を正確に予測して計画を立てた。どう

いうふうに予測したかという、戦争は日本軍の急襲によつて開始されるが、それに対しアメリカは太平洋諸島の日本軍基地を撃破しつつ一直線に北上して日本本土を叩くべきであり、その為には水陸両用作戦の研究及び開発が不可欠だというふうに考へた。

このエリスの研究は、スミスによりますと、来るべき事態の全体像を正確に把握したもつとも予言的な戦争計画となつた。真珠湾後その重要な指摘の多くは実際の作戦行動の青写真として活用されることになつたのです。アメリカの、この用意周到とその見通しの確さには、これはどうも敵わないと思わざるを得ない。一方日本は情眼を貪つていたわけです。

エリスが青写真を書いた水陸両用作戦といふのは、かいつまんで言いますと、まず目標の島の制海権及び制空権を奪つた上で猛烈な爆撃及び艦砲射撃で守備隊の抵抗力を弱める。しかる後に海兵隊大部隊が電撃的に強行上陸する。上陸部隊が前進するかたわら占拠した地域では工兵隊が航空基地を作り、さらなる目標に向けて戦闘機や爆撃機を飛ばす。島の攻略後は陸軍部隊が進駐してこれを守備する。そういう一連の行動を敏速に実行して要地を押しえながら日本本土に肉薄して行くというやり方であり、

海兵隊はこの戦法を完成すべく開戦六年前からカリブ海で試行錯誤を重ね、

訓練をやつていたというんです。開戦後も度重なる攻略戦を経験して欠陥を修正し、硫黄島戦を迎えることになりました。

エリスは戦争が始まる前に変死するのですが、スミスはこの水陸両用作戦の熱烈な支持者として、作戦の研究及び教育訓練に指導的な役割を果たしました。ですから真珠湾攻撃が始まった時にスミスは少しも驚かなかつたと言つています。こういうふうになるだろうということは最初から判つていた。我々の計画や要求のすべては資料ケースの中で長い間時期の来るのを待つてただけだ。真珠湾の後、軍は埃を払つてそれを取り出しさえすればよかつたのだ、そうスミスは書いています。

こうしてスミスを指揮官として海兵隊は太平洋の日本軍を次々に撃破していくわけですが、その際も情報収集に全力を傾注します。連日空中から目標の島を偵察し、師団長や幕僚クラスから大隊長に至るまで、各部隊指揮官が皆飛行機に乗つて空から島を視察する。頻りに飛行して情報を集めて地図を何度も訂正して情報の拡充に努める。ですから、例えばティニアンを攻めるといふことになつた場合には、その島について知らないことは何一つ無いという所まで自分達は情報を集めた。スミスは言っています。今回のイラク戦争の時のやり方と同じですね。そういうやり方をしていたのです。

そしてそういう情報に基づいて連日爆撃と艦砲射撃をやって敵の抵抗力を弱めた上で上陸という段取りになるわけですけれども、大規模な戦闘部隊が上陸するということになれば当然補給が必要になる。占領すれば基地を作る資材が必要になる。必要な時期に必要な物資を必要な分量だけ供給するためには輸送船に物資を積載する方法が工夫されなければならぬ。スミスによりますと海兵隊はこの物資を積載する方法を精密科学の水準にまで洗練させたといいます。

そして上陸後は敵が屈服するまで断じて攻撃の手をゆるめてはならない。休息の暇を与えず激しく攻め続けるのだとスミスは書いています。「海兵隊入隊以来、戦場における絶えざる攻撃的行動を私は常に提唱していた。すばやく叩き、強く叩き、どこまでも強く叩き続けるのだ。敵に休息を与えてはならない。態勢を建て直して反撃する機会を与えてはならない。海兵隊が戦った太平洋の戦闘においてはそれこそが勝利への最短の道であり、また被害を最小限にとどめる道でもあった。そういう考え方に従って太平洋で戦った海兵隊員はよく訓練されて、短く活発で強烈な戦闘の原理を叩きこまれた将校の指導に実によく応えた」。そうスミスは結んでいます。

でも、たしかに硫黄島にやってきたアメリカ軍を見ると、トイレットペーパーや煙草から犬の餌、それから墓標に至るまで、何から何まで全部持って来て、ある程度の規模の都市の一月分分くらいの物資を全部持って来たといえます。日本軍が水が無く食べ物が無くてと苦労していたのと比べると、海兵隊などはしょっちゅう風呂には入るは、ステーキを食べるはという状況なのです。ただたしかに物量はすごいんですけれども、いかに資源が豊かでも、それだけではシャーマン戦車も作れないし、ブルドーザーも作れないし、火炎放射器も大型爆撃機も、原子爆弾も作れないわけです。最小限の損害を以て最大限の打撃を与え、最短の時間で最大の目的を達する唯一可能な方法、それを徹底的に追求する合理精神が豊富な資源を強力な兵器や膨大な物資に変えるわけにあります。

## 南北戦争に学ぶ

その点、私は論理の糸というふうに書きましたけれども、栗林中将の場合と異なつて、つまり日本にはそういう合理精神の伝統が非常に希薄ですが、スミスの場合には先輩がいたわけですね。前の湾岸戦争が起こった時のことです。あの時の野戦軍司令官はシユワルツコフでしたが、彼がサウジアラビアの司令部で、ある本を一生懸命読んでいた。その本は南北戦争の時の北軍の

司令官シャーマンの回想録でした。それを手垢が付くくらい一生懸命読んでいたというんです。それを報じていたのはニューズウィークですが、湾岸戦争の時に、ニューズウィークにしろタイムにしろ、南北戦争に対する言及が非常に多かったです。何故だろうかと思つて調べてみると、今のアメリカの軍人は皆南北戦争の時のグラントとかシャーマンとかリーとかいう優れた軍人をお手本にしているということがわかりました。巨大な軍隊を動かす合理的なノウハウが確立されたのは、南北戦争の時だったのです。

例えば北軍の司令官のグラントが信じていたやり方というのは、どんな代償を払っても絶え間なく攻撃をし続けることでした。「屠殺屋グラント」なんて渾名が付きましたけれど、被害がどんなにあつても絶え間なく攻撃し続ける。それで南軍は潰れるんです。そしてその合理的な戦法について、戦後、こういうふうには言ったといえます。

「自分の戦法はまことに簡単だ。まず敵の所在を知る。すみやかに敵を捕らえる。可能な限り激しく叩き、前進し続ける。それだけのことだ。」それを実際に行つて南軍のリーを潰したのがグラントですが、グラントの親友がシャーマン、硫黄島戦の時のシャーマン戦車というのはこのシャーマンから取つたわけですが、彼もまた非常に合理的な戦法を編み出した人で、「近代戦争の予

言者」と言われています。

南北戦争は世界最初の近代戦争と言われますけれども、それは単に兵器が新しくなったというだけではなくて、大軍を動かす近代的な合理的戦法というソフトウエアが確立されたことも意味します。

シャーマンの有名な言葉に、「戦争は地獄そのものであつて、地獄たる所以を敵の軍隊のみならず統後にいる敵国民にも徹底的に思い知らせることによつてのみ終結を早めることができる」というのがあります。また、南部のアトランタを攻撃するに先立ち、彼は言いました。「北部がなすべきは戦争の恐怖を嫌というほど思い知らせる事によつて、南部の戦意を完膚無きまでに打ち砕くことだ。南部人に我々を愛させることはできないが恐れさせることは出来る」。こういうシャーマンをリンカーンは全面的に支持しました。リンカーンについては、奴隷開放の父という面でのみ語られることが多いですが、凄まじい政治家の側面もあったのです。

ところで、このシャーマンの近代戦争の論理から第二次大戦における東京大空襲、ドレスデン大空襲、及び広島、長崎への原爆投下までの間には、一本の論理の糸が真つ直ぐに通つていて、現代アメリカの作家ロバート・ペン・ウォーレンが言っています。今回のイラク戦争についても、同じ事が言えると思います。すべて同じ論理の糸が

通っているのです。

湾岸戦争が起こった時にあるミニコミに、シャーマン論を書きまして、シャーマンの持つ凄まじい合理精神を日本人は知らない、そういう意味のアメリカの恐ろしさを知らないと書いたことがあるんですが、その中にウォーレンの『南北戦争の遺産』という名著の文章を引用しました。

南北戦争を理解しないと現代のアメリカはわからないとウォーレンが言っているところです。今アメリカは統一国家ですけど、一つ一つの州が集まった一種の国際連合みたいな状態が南北戦争以前のアメリカだったのです。本当の意味の統一国家じゃなかった。ところがそのアメリカが、六〇万人の死者を出す内戦をやって、初めて一つの統一国家になった。つまり、南北戦争が現代アメリカを形作る決定的な要因だったわけです。

そういう今日の統一国家としてのアメリカのみならず、大企業の出現、高度な科学技術の発達、近代的な軍事思想等々、今日のアメリカの特質をなすこれらの要因を理解する為には南北戦争を考えなければいけないと言った後で、ウォーレンは以下のように言っています。「南北戦争が戦はれた千八百六十一年と千八百六十五年との間に(丁度日本というと明治維新の時期です)、アメリカは巨大な軍隊を動員し、装備し、配備する方法を取得すると同時に、それを賣

行する意思と確信とを身に附けた。更に、これが最も肝腎な點だが、軍事力や経済力への新たな確信に裏附けられて、アメリカは舊來にもまして強烈な使命感を備へた國家として出現するに至った。南北戦争は第一次大戦と第二次大戦の爲の祕密の學校であった。ドイツの皇帝も總統も、アメリカについての正しい歴史の本を讀んでゐなかつた。」(編集者註 留守教授訳)

ドイツの皇帝というのは言うまでもなく第一次世界大戦の時のドイツ皇帝、總統はもちろんヒットラーですけども、アメリカについて正しい歴史の本を讀んでいなかっただけなのは、ドイツ皇帝やヒットラー總統だけじゃなくて、戦前の日本も同じだったし、今日そういう事情は変わったであろうか。例えばシャーマンの凄まじい合理精神を日本人はどれだけ知っているだろうか。そういうものが今のアメリカ軍を動かしているという現実を知っているだろうか。また今日はお話する時間はありませんでしたけれど、ウォーレンが言っているアメリカの「強烈な使命感」、その本気といえますか、その真剣さというものを、日本はアメリカの同盟国と言っていますが、どれだけ知っているのだろうか。そういうことについて本気で知る努力を続けることこそ、私は帝国陸軍きつての知米派であった栗林中将の悲劇の死を無駄にしない最大の所以であろうというふうに思うわけ

あります。

時間になりました。どうもご静聴ありがとうございました。

野地常任幹事から

私が留守先生を知りましたのは、先程から話に出ている『月曜評論』というミニコミ誌で、先生の栗林中將論を讀んでいたからですが、お目に掛かって、その該博な知識と並々なぬ気力、文筆者として何をしなければならぬかという本分への御自覚の強烈さに心を打たれました。

今日ここで先生のお話を聞いた私共は、嘗て祖国の急に於じて戦って死ぬことだけの時代に、そのような修練をし、その覚悟でいた若者でございました。同台三〇年を御一緒に勉強して参りましたが、実際には、我々が身を置き本分を尽くそうとした基である帝国陸軍そのものについては、その本質的なことについて、今まで聞くことも検討することも、残念乍ら少なかったと思えます。

軍の本質についてもっと知ろう。反省すべき事の実態を知ろうという会員からの意見も常々寄せられていましたので、留守先生には、私の方から、栗原中將軍のことと共に、帝国陸軍のことに ついて研究され感じられていることを、ざつとばらんに思っている通り話して頂けないかと、お願いしたわけであり

ます。お聞きになった通り、寧ろ私共が想像していたより遙かに大きく深いお話を伺うことが出来ました。

特に軍人が軍人の本分である敵と命を懸けて戦うことよりも、中央や後方

で政治や行政や企画の仕事に就くことを偉そうに思ったり自標としていた弊風。そんな軍でどうして勝つことが出来るだろうかとの厳しいご指摘には、皆様も肺腑を抉られたことでしょう。戦争も文化であるという先生の基本的理論の中から、これからの日本の在り方と日本人に対する根本的な訴え掛けをして頂ける文学者に本日私共は初めてお目に掛かりました。

今まで私共は、現状を憂い、将来の日本を語るに当たって、極東裁判史觀からの脱却とか、誇りの回復とかという観念的な表現でしか語っていなかっただけですが、先程のお話にもありましたように、今はもう硫黄島の戦いを知っている日本人が少なくなっている時代です。日本の真の姿や歴史の事実を伝えるに当たって、具体的に世界の人が尊敬している人のことや、今までの文化の中での至らなかつたことは何なのかを、今日の先生のお話のように具体的に明確に認識して説いてゆかねばならないことを、つくづく感得致しました。

そして、先生のように、本当の日本人のことを、正確な知識と広い視野と深い思考の中で、外国人にも、日本人にも伝えて下さる方に、私共は更に多くのことを教えて頂くようお願いすると共に、また先生のこれからの学問的お仕事に出来るだけの御協力を申し上げたいと祈念するところでございます。

本日は、長時間に亘り、嘗て無い感銘の深いお話を拝聴することが出来ましたことに対し、重ねて厚く御礼申し上げます。(一同拍手)

どうも有り難うございました。



摺鉢山に星条旗を立てる米兵士  
(アーリントン墓地の記念碑の構図)



硫黄島における栗林中将

硫黄島戦における日米両軍の損耗

日本軍		米軍	
戦死	陸軍 12,723	海兵隊 士官 276	
		下士官 5,633	
	海軍 7,406	海軍(将兵) 881	
		陸軍 9	
計	20,129	計	6,821
戦傷	陸軍 726	海兵隊 士官 872	
		下士官 19,048	
	海軍 297	海軍(将兵) 1,917	
	(軍属76含)	陸軍 28	
計	1,023	計	21,865
合計	21,152		28,684

注・・・戦死には戦傷死及び行方不明を、戦傷には戦闘疲労2,648名を含む。  
日本軍の損耗数は厚生省最終発表によるもので、公刊戦史「戦史叢書」の数字を訂正した

硫黄島戦における日米両軍の相对戦闘能力

兵種	日本軍	米軍
歩兵	9個大隊	27個大隊
戦車	1個連隊 中戦車×11 軽戦車×12 計23両	3個大隊 重(火焰)戦車数両を含む中戦車約150両
砲兵	5個大隊強	14個大隊
陸軍	12擧榴×10、野山砲×24、 白砲×12、迫撃砲×62、 噴進砲×40 計148門	75 <sup>mm</sup> 榴弾砲×48、105 <sup>mm</sup> 榴弾砲×96 155 <sup>mm</sup> 榴弾砲×24 計168門
海軍	水平砲 計23門 15 <sup>cm</sup> 砲×4 14 <sup>cm</sup> 砲×4 12 <sup>cm</sup> 砲×7 短12 <sup>cm</sup> 砲×8	発射弾数45万0156発
航空	特攻機 延約75機	延約4,000機以上 投下爆弾 約8,360 <sup>kg</sup> 以上(ロケット12,148発、 ナバーム456発以上を含む)
艦砲	艦砲支援なし	艦砲 戦艦6~8、巡洋艦4~9、駆逐艦9以上 射撃 14,250 <sup>kg</sup> 以上
総兵力	21,152名 陸軍 13,449 海軍 7,703	61,000名

注・・・艦砲射撃は昭和20年2月16日から3月25日までの概量で、艦艇数は昭和20年2月16日から3月10日までの在硫黄島海域の現数。  
米航空延数、昭和19年6月から同20年3月ころまでの日本軍側の累計数で、投下爆弾量は昭和19年12月から20年3月15日ころまでの概数。

上記「硫黄島戦における日米両軍の損耗」並びに「硫黄島戦における日米両軍の相对戦闘能力」の表は防衛大学助教授武市銀治郎著「硫黄島—極限の戦場に刻まれた日本人の魂—」大村書店刊から転載致しました。